

「日本胸部外科学会学術調査結果に基づいた手術成績の公開」と 「本邦における治療成績評価に関する提言」

1. 背景

- 1) 日本胸部外科学会は1948年に開設され、「心臓血管外科」「呼吸器外科」及び「食道外科」に関連する胸部疾患を扱う総合学会として、胸部外科学の進歩に貢献してきた。
- 2) 本学会においては1986年よりこれら3分野、すなわち「心臓」「呼吸器」及び「食道」の手術において我が国の学術調査を実施し、その結果を本学会の英文誌において発表している。
- 3) 本学術調査は会員の絶大なる協力と多大なる尽力によりその経年的「継続性」と幅広いデータの集積と高い回収率による「網羅性」において、国内外からも高い評価を得ているものと自負している。またその「継続性」としての経年的成績は本邦の手術成績の向上と、欧米の手術成績に遜色のない寧ろ凌駕したデータが示されている。
- 4) さらにこのような全国レベルのデータを有している学会としての責務として社会に対してこの学術調査に基づいた情報発信の重要性に鑑み、検討した結果、2009年の学術調査のデータから各施設の承諾のもと症例数のみではなく死亡率を含んだデータを公開することとした。なお、「死亡率」を公開して良いという承諾が得られた施設はすべての調査対象施設の約90%であり、このことは本調査の信憑性の高さ信頼性を保証するものとする。
- 5) 社会には手術症例数を中心としたいわゆる「ランキング本」が種々発刊されているが、不十分なデータや解析に基づいたものも多くみられ、学会の調査による「公式」のものではなく、日本胸部外科学会としては我が国の胸部外科手術成績を広く正確に社会に公開し、国民に対し「信頼に基づいた医療」を実践すべくここに声明を発信するものである。

2. 学術手術成績に基づいた手術成績の分析により以下の結果がえられた

- 1) 心臓大血管手術について
 - i) 心臓大血管手術総数は年々増加傾向にある。
 - ii) 単独冠動脈バイパス (CABG) 数は漸減、心臓弁膜手術は漸増しており、30日死亡率も0.8~2.0%前後と安定している。
 - iii) これらの成績は米国と比較して遜色なくむしろ凌駕している。
- 2) 呼吸器外科手術について
 - i) 手術数の推移は年々着実に増加している。
 - ii) 30日死亡率は1%未満で安定している。
 - iii) 米国との比較においても30日死亡率は良好である。

- 3) 食道手術について
 - i) 食道手術の推移はこの10年間ほぼ一定である。
 - ii) 食道がん手術成績も30日死亡率も1%で安定している。
 - iii) 米国との比較においても死亡率は我が国が良好である。
- 4) 病院手術数と手術死亡率(30日死亡率)の関係結果解析における注意点として、
 1. リスク補正が行われていない、
 2. 症例数が少ない施設での死亡率は統計学的信頼性が低い、などがある。「病院手術数—死亡率」分布図から「症例数の少ない病院は亡くなった患者数のわずかな差でばらついているが、一定数を超えると死亡率に差がない」ことが明らかとなった。

3. 今後の課題

- 1) 手術には個々の症例において難易度や危険度は様々であり、個々のリスクに応じた分析がその調査の信頼度をより高めることは当然であり、今後そのような因子も加味した解析を進めてゆく必要がある。
- 2) 手術成績を評価するには呼吸器外科や食道外科などのような、主に腫瘍を対象とする手術では、「5年生存率」というような長期の成績も重要である。

4. 「まとめ」及び「提言」

手術成績の評価は単に手術症例数からのみ判断できるものではなく、手術に関与している学会主導によるデータの調査と分析が重要で、またその公開に当たっては学会が主体となって行うべきであることを提言する。

平成23年12月22日

特定非営利活動法人日本胸部外科学会	理事長	坂田 隆造
同	前理事長	田林 暁一
同 学術委員会	委員長	桑野 博行
同 広報 (Homepage・Internet) 委員会	委員長	千原 幸司
同	理事	横見瀬裕保